

第66回（2022年度）日本アメリカ文学会 関西支部大会フォーラム（要旨）

インフルエンザ・パンデミックとアメリカ的想像力

司会	相本 資子	（関西学院大学（非））
ディスカッサント	大井 浩二	（関西学院大学（名））
講師	新関 芳生	（関西学院大学）
講師	山下 昇	（相愛大学（名））
講師	坂根 隆広	（関西学院大学）
講師	中 良子	（京都産業大学）

1918年から19年にかけてスペイン・インフルエンザが猛威をふるい、その犠牲者は全世界で5千万人から1億人に及んだと言われている。アメリカ合衆国も深刻な打撃を受け、*Viral Modernism: The Influenza Pandemic and Interwar Literature* (2020)の著者 Elizabeth Outka は“the United States suffered more deaths in the pandemic than in World War I, World War II, and the Conflicts in Korea, Vietnam, Afghanistan, and Iraq—combined”と述べている。

このインフルエンザ・パンデミックに対して、同時代のアメリカ作家がどのような反応を示していたかを考えてみようというのだが、それを本格的に扱ったアメリカ小説は意外に少ないので、Elizabeth Outka に倣って、Willa Cather, *One of Ours* (1922); Thomas Wolfe, *Look Homeward, Angel* (1929); William Maxwell, *They Came Like Swallows* (1937); Katherine Anne Porter, *Pale Horse, Pale Rider* (1939) を取り上げる。

この4冊の小説のそれぞれで仔細に語られている感染症の問題を分析するだけでなく、蔓延するインフルエンザを同時期に進行していた第一次世界大戦と関連づけて論じることができれば、極めて刺激的なフォーラムになることが期待される。 (大井浩二)

無垢のアメリカ神話の感染的回帰——*One of Ours*の再評価の試み

Willa Cather の *One of Ours* (1922) は、彼女の作品の中で初めて一般的な読者を広く獲得した小説であり、彼女の文学者としての地位を確立したとされているが、Cather 研究においてはその注目度と評価は格段に低い。現在の Cather の概説書の多くではこの作品に関しては表面的な記述のみで、内容の紹介さえ行われぬことも珍しくはなく、実際には無視に近い扱いを受けていると言うべきである。発表当初からこの作品は、好調なセールスの一方で否定的な反応も得ており、その多くが、五部構成の本作の第四部と最終部において、唐突に第一次世界大戦の物語と主人公の（多分にロマンティックな）戦死が語られることに対するものである。発表から今年でちょうど100年目の今も続く冷遇は、第一部から三部までのきわめて土着的かつ牧歌的なアメリカの物語に、第四部と五部のヨーロッパでの戦争の物語が接ぎ木されることへの、審美的あるいは批評的な困惑と反感に根差すもののようなのだ。本発表では、この不自然な接ぎ木を、Elizabeth Outka の *Viral Modernism* での解釈を足がかりとしながら、物語の前半部と後半部をつなぐ移動のベクトルがアメリカから旧世界へと向いているという点に着目しつつ、神話、政治、経済の視点から読み解いてみたい。 (新関芳生)

パンデミック・ナラティブとしての *Look Homeward, Angel*

Thomas Wolfe の *Look Homeward, Angel* (1929) が、1918 年インフルエンザ・パンデミックを描いた数少ないアメリカ文学の一つであるという Elizabeth Outka の指摘に従ってこの小説を読む読者は、終わりに近い 35 章で、主人公 Eugene の兄 Ben が肺炎によって死ぬ場面に遭遇する。しかしこの死がインフルエンザ・パンデミックによるものであると気づくのは容易なことでない。Outka はこれを「異様な文学的・批評的沈黙」、「消去」と呼び、その原因として戦争を挙げているが、その他にもいくつかの理由が考えられる。

その一つが当時の医学的状況である。発疹チフス、黄熱病、ジフテリアなど恐ろしい病気の致死の流行の記憶が、人々の間に生々しく残されており、インフルエンザの流行が特別なものとして認識されていなかった可能性がある。そのような状況は作品中にも随所に書き込まれている。今一つが戦時体制構築による情報統制である。人々は疫病に対する情報から隔離されていたためにパンデミックの存在を共有できなかったのである。

また作品の内的発展にも理由が見い出される。この事件の直前に Eugene の成長の節目となる出来事（失恋、家族間の反目、労働経験など）が続出するために主人公や読者の意識がパンデミックから逸らされるプロット構成ともなっている。 (山下昇)

William Maxwell の *They Came Like Swallows* における感染・家族・視点

1918 年のインフルエンザによって母を失った著者による自伝的な小説 *They Came Like Swallows* (1937) は三部構成になっていて、母の死の前後の家庭内における出来事が、幼い弟、足の不自由な兄、妻を失った父の視点から順に描かれる。パンデミックとそれによる死が家族にもたらす影響という題材を扱うにあたって、著者が小説の形式、とりわけ視点の問題に苦勞し、母を除く家族三人の視点を採用して限定的な三人称で描くという（モダニスティックな）形式の採用によって道が開けた、という事実は興味深い。当時における小説の評価でも問題となったこの形式的特徴は、今でもこの小説が成功しているかを考えるうえで最重要の要素といえる。視点の問題は、まずは母の死をいかに描くかということと直結していて、感染という題材とはあくまで間接的にしか関係していないともいえるが、本発表ではその間接性のありかたを検討することで、小説形式とパンデミックの関係を探ってみたい。(坂根隆広)

死に至らなかった病——“Pale Horse, Pale Rider” における戦争とインフルエンザ

Katherine Anne Porter の “Pale Horse, Pale Rider” (1939) は、作家の分身である Miranda を主人公とする一連の短編の中でも、とりわけ自伝的要素の強い作品といわれている。作中の Miranda と同様に、1918 年第一次世界大戦終結の年、Denver で新聞記者をしていた Porter は、インフルエンザに罹患するも奇跡的に一命を取り留めた。Porter は、この「臨死体験」が「私の人生を真っ二つに分けてしまった」と語っている。その 4 年後、1922 年に Porter は初の短編 “María Concepción” を発表する。そしてこのデビュー作以降、「死」は彼女の文学の中心的主題としてさまざまな形で描かれてゆくのである。そのような事実に鑑みると、戦時下のインフルエンザ・パンデミックにおける「死」の体験を描いた “Pale Horse, Pale Rider” は、Porter の作家としての人生の原初的体験を物語る作品として読むことができるだろう。本発表では、生死の境界をさまよう Miranda の語りから Porter 文学の根底にある作家の視点を探ることで、パンデミックを捉える文学的視点について考える契機としたい。(中良子)